

考える、語り合う No.31

一人一人が輝き、笑顔あふれる学校 まず考える、つぎに語り合う

令和4年2月18日
長崎市立川原小学校
学校だより
校長 寺田 成広

ホタルの幼虫放流を見ながら

14日月曜日、4年生が、これまで大切に育ててきたホタルの幼虫を宮崎川に放流しました。ホタル保存会の高田さんの指導を受けながら、ホタルの飼育方法を学び、手間を惜しまず時間をかけてここまで育ててきました。汲みに行った川の水を抱えて登校する4年生の姿を何度も目にしました。小まめに掃除・観察を続けて、大きく育っていく姿に喜んでいました。

そのような様子を見て、「4年生はホタルの幼虫を育てるのが分担になっている」という仕事としての責任感を超えた、ホタルの命を尊び、成長を願う愛情を感じました。放流する際にも、「元気でね。」「エサをちゃんと自分でとってね。」「絶対また会おうね。」などと、ホタルへ心からのメッセージを送っていました。

川原小HP: [4年「ホタルの幼虫を放流しました」](#) | 長崎市立川原小学校 ([nagasaki-city.ed.jp](https://www.nagasaki-city.ed.jp))

4年生を始め、川原小学校の子どもたちは、心が豊かで温かいと常々思っています。その理由は、やはり「家庭で愛着(特定の人物との情緒的絆)が十分にできているからだろう」と考えます。以前、長崎女子短期大学福井謙一郎先生(心理学)の「児童生徒の諸問題の対応～愛着形成の重要性～」という講話を聞いたことを思い出しました。概要は以下のとおりです。

○乳幼児期から児童期にかけての親との愛着形成のプロセスの中で、「親を求める行動(甘え)」を受容してもらって「しあわせ」を味わうことが、他者への信頼や優しさにつながっていく。(赤ちゃんが授乳時におっぱい・哺乳瓶から突然口を離して親の顔を見るのは、親の反応を求める行動だそうです)

○愛着を深めるのは「時間」ではなく、「質」である。

(忙しい親ほど、質を高める: 質を高める3step)

- ① 目を合わせる = 感情のやり取りの練習
- ② 笑顔に必ず答える = 笑顔は心の栄養剤
- ③ 年齢に合わせて子どもを抱く、身体接触、抱きしめる



③に関して先生は、「抱き癖」という言葉について、この間違った風説が「現代の愛着障害を生み出した元凶である」と言われています。抱くという行為は、人間の最も基本的な愛情表現です。『かわいい!』、『大好き!』などの言葉をかけながら抱きしめてあげることが大切です。嫌がる子もいるかもしれませんが徐々に慣れます。遊びの中での身体接触もいいです。」と付け加えられました。私自身も、我が子を抱くときに、この「抱き癖」という言葉が頭のどこかにあって、子を抱きたい気持ちをセーブすることが必要だと思っていました。もっと早く聞きたかったと思いました。

「もう小学生だし。」「もう体も大きくなったし。」と親が勝手に壁をつくらず、「まだ小学生だし。」「心ももっと大きくなってほしいし。」と抱いてあげてください。学級担任をしている頃、学校で親子活動を行う際に、敢えて身体接触がある運動を取り入れるようにしてきました。高学年の子どもたちも、言葉では「嫌だ。」「したくない。」と言いつつも、その実、顔には隠そうにも隠し切れない喜びがあふれているものでした。

もっともっと愛着を深めて(抱きしめ、身体接触し)、今でもすてきな川原小の子どもたちを、より輝かせてほしいと思います。

